

「土砂災害の経験を教訓に」

青森県 外ヶ浜町立三厩小学校 5年 ^{かしわや} 柏谷 みのり

「土砂災害」という言葉を聞いて、みなさんはどのようなイメージをもつのでしょうか。わたしは今まで、この「土砂災害」という言葉について、あまり深くイメージできませんでした。ニュースで聞いたことはあるけれど、しっかりと意識して考えたことがなかったからです。ただなんとなく、「雨のえいきょうで山の土がゆるくなるのかな」「土や砂が家の方へ落ちていくのかな」というくらいにしか思っていないでした。ところが、この考えが大きく変わる出来事が起こりました。

昨年の8月上旬のことです。わたしが住む外ヶ浜町の三厩地域全体に大雨がふり続けました。今まで経験したことのない大雨でした。そのえいきょうで、山やがけの地面がぐずれ、川から海へと土砂が流れ出ていきました。土砂が混じった川や海はとてものにござって、いつものおだやかな三厩の海と同じ海だとは全く思えませんでした。まるで、別な世界になってしまったように感じられて、わたしは怖くてたまりませんでした。とても外に出るような気持ちにはなれず、ずっと家の中にいました。家の中にもっていると、「学校、休校になってしまうんじゃないかな」「友達は無事なのかな」など、不安や心配な思いだけがどんどんふくらんでいき、今にも泣き出しそうだったのを、今でもよく覚えています。

豪雨は全くおさまる気配がなく、「このまま永遠に続くんじゃないかな」と思うほどでしたが、3日ほど経ったころ、ようやく長い長い雨が弱まってきました。幸い、わたしの家族やわたし自身、そしてわたしの家に被害はありませんでした。「よかった」と、心の底から安心しました。しかし、ほっとしたのも一しゅんの事でした。家の前へ出てみると、プラスチックやとう木など、海のごみが家の目の前まで、たくさん流れついていた。

「いったい何が起こったの。」

思わず、わたしはそうつぶやいていました。頭では分かっていたけれど、目の前の現実をなかなか受け入れることができなかつたのです。町の様子を見てみると、もっと被害が大きな場所もありました。川の水がはんらんして、中まで土砂が入ってしまっている家や、土砂でつまっている用水路。高いところや親せき、友達の家にはひなんしている人もいました。学校に行く途中のトンネルは立ち入り禁止になり、学校に行くことも困難になっていました。

そんな経験から約1年、今でもその被害の爪あとは残っています。トンネルの前は通れるようになったけれど、完全には直ってはおらず、未だに一方通行になっています。土砂に飲まれてしまった家々は、そのままになっています。しかし、わたしもふくめて、三厩小学校の全員が元気に学校に来ることができています。被害の直後も、誰一人休まずに学校に登校していました。お互いの無事を確かめ合って、とても安心したのを覚えています。その経験が、わたしの土砂災害への防災意識を高めるきっかけとなったのです。

土砂災害は、いつ、どこで起こるか分かりません。わたしの住む地域のように、山も川も海もある地域では、むしろいつ起きてもおかしくないのだと思います。だからこそ「備え」が大切なのだと感じています。あらかじめリュックに非常食や防災グッズを入れた、非常用持ち出し袋を玄関の近くに準備しておくこと。避難経路を確認し、土砂災害が起きてもすぐに逃げられるようにしておくこと。テレビなどで雨の降水量や天気に関する情報を調べておき、心づもりをしておくこと。このように、いざという時のために、日頃から準備しておくことがわたしたちには必要なのだと思います。

本当は、土砂災害なんて二度と起きてほしくありません。しかし、「土砂災害を未然に防ぐ」ということは、わたしの力では不可能です。わたしにできることは、土砂災害が起きた時のためにしっかりと備えておくことしかありません。だからこそ、自分にできることはしっかりとやって、被害を最小限におさえられるようにしていきたいです。また、三厩小学校のみんなで防災への意識を高めていければいいなと思っています。今回のショックで悲しい思いをした経験をむだに

令和5年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文小学生の部 優秀賞(事務次官賞)

せず、そして二度と同じ思いをしないように、わたしはこれからも土砂災害への対策を進めていこうと思います。